様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　11 日現在

機関番号：14401
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2012
課題番号：22651089
研究課題名（和文）　アラビア語資料とユダヤ諸語資料に見る聖書中の人物イメージの伝承と発展
研究課題名（英文）　The Transmission and the Development of Biblical Characters as depicted in Arabic and Jewish Literatures

研究代表者
高階　美行　（TAKASHINA YOSHIYUKI）
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号：70144540

研究成果の概要（和文）：クルアーンやアラブ文献中の旧約聖書の人物への言及内容が聖書本文にない場合、ユダヤ文献の何に対応するかを、古典文献中で調べ、人物イメージの発展はもっと詳細に後付けできること、イスラム時代初期に成立した旧約聖書アラム語訳の分析が重要であること、アラブ側文献では「預言者達の物語」がユダヤ側伝承内容にきわめて近いことなどを示した。また、アラブとユダヤ双方の文献で、古典文献検索を容易にするため、人物別に記載箇所データを作成した。

研究成果の概要（英文）：In Qur'an and Arabic literatures, there are many passages that have no explicit corresponding references in the Old Testament. This research was made in order to make clear to what Jewish sources these Arabic descriptions correspond. The results show that the development of extra-biblical images of biblical characters can be described more elaborately, that the analysis of the Aramaic Targum text which came into being shortly after Islam is very important, and that among Arabic literature al-Kisai's *Tales of the Prophets* (qisas al-anbiya) is very close to the Jewish traditions. Also, reference data have been compiled digitally for easier cross-reference to biblical characters in the relevant classical texts, Arabic and Jewish.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	600,000	0	600,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	360,000	2,160,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：地域研究、外国文学、西アジア、ユダヤ諸語

１．研究開始当初の背景

イスラームの聖典クルアーンの中には、ユダヤ教に由来する旧約聖書中の人物や物語が頻繁に描かれ、キリスト教に由来する新約聖書中の物語が言及されている。このうち、旧約聖書中の人物や物語に関しては、主としてユダヤ文化研究者の側から既に何点かの研究が公刊されてきた。

Speyer, H. (1931), *Die biblischen Erzählungen im Qoran*. repr. Hildesheim, 1988.

Sidersky, D. (1933), *Les Origines des*

Légendes Musulmanes dans le Coran et dans les Vies des Prophètes. Paris.

これらの研究は主として、クルアーンやアラブ・イスラム文献中の旧約聖書関係の人物や物語への言及内容が聖書本文に言及がない場合、ユダヤ教文献の何に対応するかを、ミドラシュ（Midrash 旧約聖書註解）やハガーダー（Haggadah/Aggadah 伝説・伝承）などユダヤ教の文献（中世ヘブライ語やアラム語）の中に渉猟し、アラブ側文献が成立する時代までのユダヤ教側伝承内容との共通性や類似性を求めようと努力するものであった。この研究は、イスラーム側研究者にとっても、クルアーン中の言及が旧約本文に必ずしも即応しない点を解明するものとして、評価されてきた。

これらの研究は主として古典文献に依拠するものであって、重要なユダヤ教文献である諸タルグーム（Targums 旧約聖書のアラム語訳）への参照が希薄であること、両者に共有される伝承の結果としての民話類（アラビア語パレスチナ方言等）が対象とされてはこなかったことの２点から、アラビア語（古典語＋口語）、ヘブライ語、アラム語を研究対象としてきた者として本テーマを設定した。

２．研究の目的

本研究は、宗教文化が異なるために研究上も異なる研究者が対象としてきた聖書中の主要な人物のイメージに関する伝承と発展のプロセスを、アラブ・イスラム文化の側からはアラビア語文献を、ユダヤ文化の側からはユダヤ諸語文献を使用しつつ分析し、伝承の成立、吸収と相互影響、発展の視点から跡付けようとするものである。

しかし、前項「１．研究開始当初の背景」記載する若干の先行研究があるものの、同時に、前項末尾に言及する２つの弱点もある。また、研究の細分化と多様な言語文献を扱う必要からその後の発展は乏しいことや、個別分野においては新研究の刊行もあることから、個別の伝承内容を取り上げ、少なくとも古典文献に依拠しつつ、タルグーム文献とパレスチナ方言テキストから関連データを抽出することにより、アラブ、ユダヤ双方のインタラクティブな視点から聖書中の人物イメージの成立と発展を論じうることを立証したい。

これにより、伝承の相互影響ないし相互浸透の観点から論じることにより、対立や反目のみとは限らない両文化の側面を浮かび上がらせることができよう。

３．研究の方法

本研究はおおまかに、次の３段階に分けた。

(1)アラブ・イスラム資料とユダヤ資料に共通する聖書中の人物の特定。古典文献資料としては、既に言及した Sidersky (1933)や Speyer (1931)の研究を一応のガイドラインとする。

(2)それに基づく関連資料の調査と分析。

①アラブ・イスラーム側古典文献の調査分析。いわゆる「イスラエルもの」Isrā'ilīyāt と呼ばれる預言者物語などの文献資料の分析である。先行研究を踏まえつつ主要な文献を対象とする。

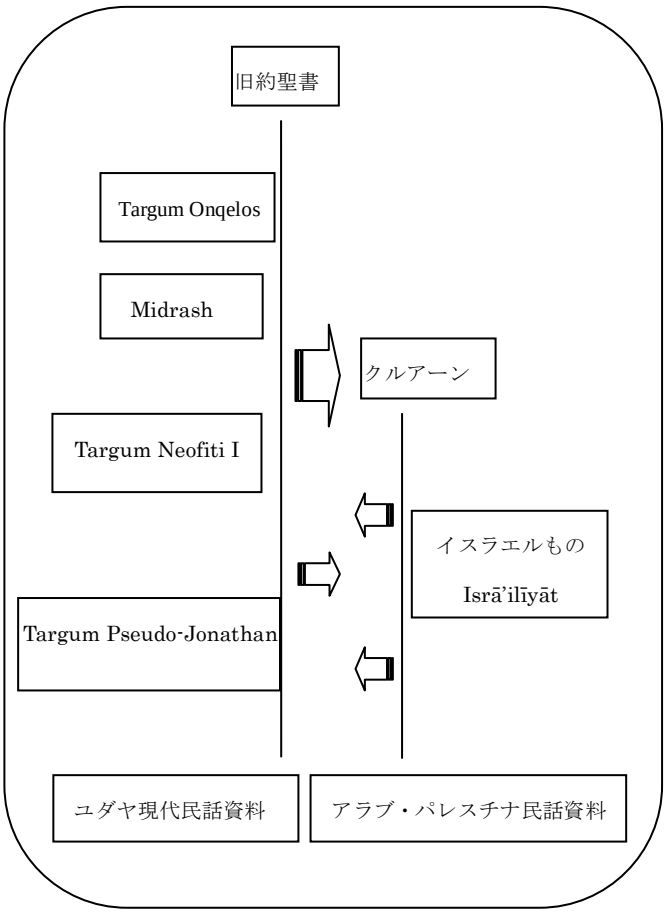
②（タルグームを核とする）ユダヤ古典文献の調査分析。

MidrashやHaggadah/Aggadah等において一定の基本文献が存在するのでそれらを活用するが、タルグーム文献においては、各種の校訂テキストと共に以下の詳細な翻訳研究を参照する。

The Targum Onqelos to Genesis. The Aramaic Bible vol. 6, transl. by B. Grossfeld. Edinburgh, 1988.

Targum Peudo-Jonathan: Genesis. The Aramaic Bible vol. 1B, transl. by M. Maher. Edinburgh, 1992.

Targum Neofiti 1: Genesis. The Aramaic Bible vol. 1A , transl. by Martin McNamara. Edinburgh, 1992.

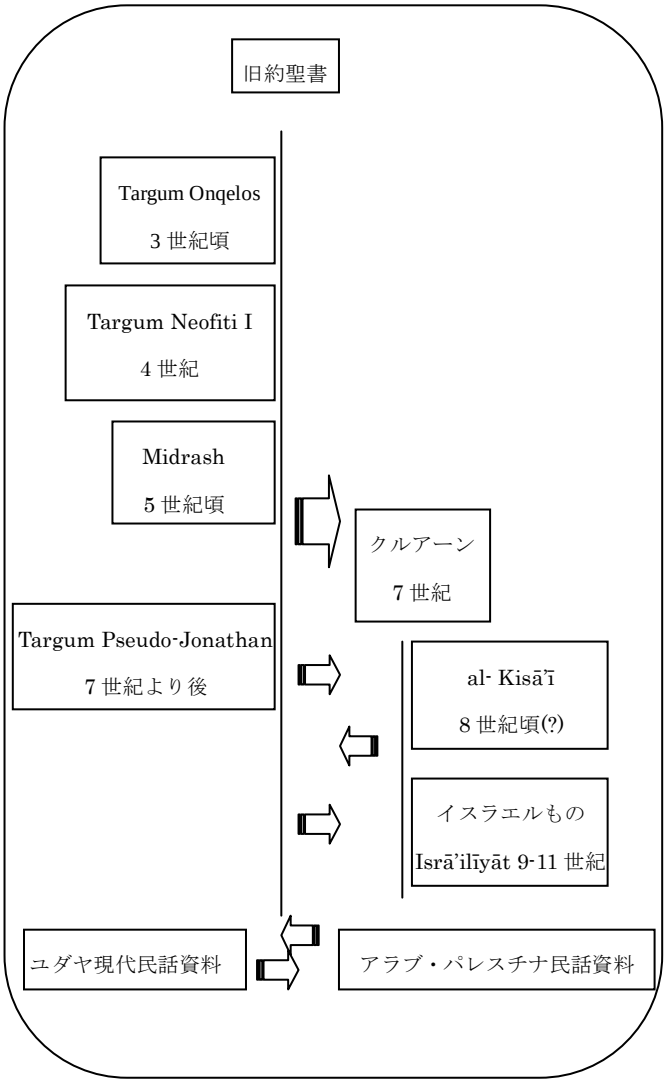


研究開始前に想定していた、聖書中の人物イメージの発展と相互影響

③アラブ・パレスチナ民話方言資料の調査分析。
古い資料としては前掲の Schmidt und P. Kahle (1918-1930)ほかの研究に加え、近年のアラブ・パレスチナ民話方言資料としては、以下の文献も参照する。
Seeger, U. (1996), *Der arabische Dialekt von il-Xalīl (Hebron)*. Magisterarbeit, Universität Heidelberg.
Seeger, U. (2009), *Der arabische Dialekt der Dörfer um Ramallah*. 2vols., Wiesbaden.
④ユダヤ現代民話資料の調査分析。
　ユダヤ民話の研究の蓄積には多大なものがあるため、主としてアラブ・イスラーム圏のユダヤ・コミュニティーに伝承されたものに限定し、かつ、試行的な位置づけとする。
(3)聖書中の人物イメージの両文化における相互影響と発展の分析。
研究のまとめとして、アラブ・イスラーム側の伝承と発展のプロセス、および、、ユダヤ側伝承内容の追加・変容・発展が両文化の双方向の影響の中で進んだことを論証する予定とした。

４．研究成果
　３段階に分けた研究の方法に従い、簡潔に述べる。
（１）分析対象とするべき聖書中の人物の特定でガイドラインとする予定の Sidersky (1933)や Speyer (1931)の研究はアブラハムの妻 Hagar の分析を始めるとすぐに、ユダヤ文献の関係個所への言及が余りに簡潔で少なく、タルグームだけを調べても、もっと豊かな分析が可能と判明したので、直ちに第２点の調査に主力を移した。
（２）この過程の中で、ユダヤ側、アラブ側の文献ともに、主要な人物への言及が必ずしも聖書本文の記載順でないことから、主要な文献については、検索を容易にするために、人物別に記載箇所のデータを作成することが極めて重要であると判断し、研究補助の力を借りてその作業に入った。それらの文献は以下のものである。
①アラブ・イスラーム側古典文献。
Brinner, William M. (1987), trans., *The History of al-Ṭabarī*. Vol.2: *Prophets and Patriarchs*. Albany. (アブラハム関係のみ)
―― (2002), trans., *'Arā'is al-Majālis fī Qiṣaṣ al-Anbiyā' or "Lives of the Prophets" as Recounted by al-Tha'labī*. Leiden. (アブラハム関係のみ)
これ以外に非常に貴重な次の文献が入手できたので、書物全体にわたって、言及個所のデータ化を行った。
Thackston Jr., W. (1997), trans., *al-Kisai, Tales of the Prophets (qisas al-anbiya)*. Chicago.
本書の著者 al-Kisai は正確には人物像と時代が特定できていない（10 世紀、12 世紀頃、8 世紀の人など）が、代表的な「イスラエルもの」作品である al-Ṭabarī や al-Tha'labī（9-11 世紀）がほぼ同一の描写であっていわば正統的な伝承と位置付けられるのに対して、細部の多くで異なる。このことから、al-Kisai の収録内容は正統的な伝承が成立する前に、ユダヤ側の伝承から相当早期に継承したと理解するのが矛盾が少ないと考えられる。
②ユダヤ古典文献。
ユダヤ側文献では、極めて浩瀚な文献を調査してまとめ上げたにもかかわらず、残念ながら索引が欠如している次の文献について、聖書中の人物への言及個所をすべて拾い上げ、データ化した。
Ginzberg, L. (1909-36), *The Legends of the Jews*. Translated from the German manuscript by Henrietta Szold. 6 vols., orig. ed., Philadelphia (repr. ed. in 4 vols. without notes, 2000, Hildesheim-Zurich-New York).
再版されなかった２巻は主としてギンズバーグが参照したヘブライ語原典についての注である。その中でも極めて興味深い情報を含む原典として利用されているのが、次の文献（8 世紀）であり、これもデータ化した。
Friedlander, G. (1916), trans., *Pirke de Rabbi Eliezer*. Orig. ed., New York (repr. ed., 1970, New York).
③アラブ・パレスチナ民話方言資料の調査。
④ユダヤ現代民話資料の調査。
この２点については、残念ながら、当初予定としていなかった al-Kisai（アラブ文献）と Pirke de Rabbi Eliezer（ユダヤ文献）を対象とすることとしたことなどにより、今回の研究課題の期間では取組むことができなかった。
(3)聖書中の人物イメージの両文化における相互影響と発展の分析について、主要な論点をいくつかの典型的事例で述べる。
①アブラハムの妻サラの侍女ハガル Hagar はユダヤ側文献では、アブラハムがエジプトに下った時の事件でファラオから、ファラオの娘である Hagar をサラが侍女として貰ったと説明されるのに対して、アラブ側の正統的「イスラエルもの」である al-Ṭabarī や al-Tha'labī の文献では、ファラオの侍女でコプト女性であると説明される。ところが、al-Kisai では、ユダヤ側文献と同じく、ファラオの娘と描写されており、他のアラビア語文献と著しい対照を見せている。
②アブラハムの息子イシュマエルが妻を娶ったので、その住居をアブラハムが訪問した時、アブラハムがその妻の聡明さの度合いについて暗示的に息子に伝えるための比喩に使われる物が、テントの杭であるか戸口の敷居であるかに関してである。ユダヤ側もアラ

ブ側も、後代の文献は敷居であるが、初期のもの（al-Kisai を含む）は杭ないし入口の棒と記述されている。この例では、アラブ側の正統的文献とユダヤ側の後代の文献とが敷居で一致するので、テントの杭ないし入口の棒との説明が、砂漠における生活実態が分からなくなった地域や時代、つまり、後代になって分かりやすく変更されたと解釈できる。
③そのほか、7 世紀（＝イスラムの成立時代）より後に成立した Targum Peudo-Jonathan「偽ヨナタンタルグーム」が成立したばかりのイスラムの教えについて多くの言及を含む点は、このタルグームがアラブ側とユダヤ側との間で、聖書中の人物イメージについて重要な役割を果たしたことを強く示唆する。
④以上から、今回の研究課題では、本格的分析のための試行的分析と主要な古典文献における言及個所のデータ化に留まることになったが、研究の視点や方法論は十分に有効であることを示し得たことになる。



研究後に想定される、聖書中の人物イメージの発展と相互影響（一部推定を含む）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計　１件）
① Yoshiyuki TAKASHINA, "Hagar and Some Related Matters. Tentative Gleanings from Aramaic Targums and Islamic Traditions" in *The Arabic Language and the Palestinian Folklore in Daily Life* (LiCCOSEC vol.15), pp.64-74, 2010, Research Institute for World Languages, Osaka University.

６．研究組織
(1)研究代表者
高階　美行（TAKASHINA YOSHIYUKI）
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号：70144540

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし